

日本・ベトナム・台湾の大学院連携による 共同実践とネットワーク構築の展望

グエン タン タム

1. はじめに

グローバル化の進展と人の移動の加速に伴い、医療・司法・教育などの公共領域において、言語的・文化的仲介を担うコミュニティ通訳の重要性は年々高まっている。特に日本・ベトナム・台湾の三地域では、労働・観光・ビジネスによる人的往来の増加に伴い、外国語や少数言語を話す生活者への通訳ニーズが多様化している。

一方で、これら三地域におけるコミュニティ通訳の状況はそれぞれ異なる特徴を持ちながらも、制度化や教育体制、職業倫理の整備にはなお課題が残されている。また、コミュニティ通訳を専門職として支える基盤も、いずれの地域においても十分に確立されているとは言い難い。

このようなことを背景にし、個別の地域内での取り組みに加え、地域を越えた連携による学習や研究、実践の共有が重要な意味を持つと考えられる。異なる制度や実践を相互に参照することにより、自地域の課題を相対化して捉え直すことが可能となり、新たな教育モデルや実践の方向性を模索する契機となるためである。とりわけ大学院レベルにおける国際共同教育は、将来の実務者・研究者の育成において有効なアプローチの一つと位置づけられる。

そこで、愛知県立大学海外の実績のある大学院と連携し、協働することによって、より充実した実践的な教育・研究体制を構築するべく、日本の文部科学省の令和6年度大学教育再生戦略推進費「人文・社会科学系ネットワーク型大学院 構築事業 国際連携型」に応募・申請し、2024年9月に採択が内定し、「多言語多文化社会で必要とされるコミュニケーションデザイン能力を有する専門職人材の共同育成」プログラムは、2024年10月から本格的に始動し、2026年度から海外連携大学との共同カリキュラムを開始する。

本報告では、日本・ベトナム・台湾の大学院が連携して2025年9月末に実施した国際共同研

修いいわゆる「ULIS スタディツアー」の実践を取り上げる。本研修では、講義やフィールドワーク、現地専門家との交流を通じて、参加学生がベトナムの医療通訳の実情に触れながら学びを深める機会が提供された。こうした越境的な学習経験は、知識の獲得にとどまらず、異文化理解や専門職としての意識形成にも影響を与えるものと考えられる。

以上を踏まえ、本報告では当該研修の実践内容と教育的成果を整理するとともに、三地域を結ぶコミュニティ通訳者ネットワークの構築可能性について検討する。あわせて、今後の継続的な連携に向けた課題と展望についても考察する。

2. スタディツアー実践の概要

本スタディツアーは、日本・ベトナム・台湾の大学院が連携し、コミュニティ通訳の現状と課題を実践的に学ぶことを目的として実施された。参加学生は合同調査チームとして編成され、事前学習、現地研修、事後の振り返りを通じて、各国の制度や実践を比較・分析する機会が提供された。

事前段階では、オンラインによる準備セッションを複数回実施し、各自の研究関心の共有およびテーマ別グループの編成を行った。また、訪問先機関に関する調査や、各国におけるコミュニティ通訳の制度的背景についての情報収集を通じて、問題意識の明確化を図った。

現地研修においては、講義、フィールドワーク、専門家との意見交換が組み合わせられ、参加学生は多角的に学びを深めた。特に、医療機関や教育機関、支援団体等の訪問を通じて、コミュニティ通訳が実際の現場でどのように機能しているのかを具体的に理解する機会が得られた。また、現地の専門家や実務者との対話を通じて、制度的制約や倫理的課題、人材育成の現状についても多くの示唆が得られた。

さらに、研修期間中には中間報告および最終報告の機会が設けられ、各グループは調査結果を共有するとともに、他グループとの議論を通じて理解を深化させた。これにより、単なる知識の獲得にとどまらず、異なる視点を統合しながら課題を多面的に捉える力の育成が促された。

2.1 目的

愛知県立大学・国際文化研究科・コミュニティ通訳学コース取り組み文部科学省事業の一環として、日本愛知県立大学(APU)・台湾東海大学(THU)・ベトナムハノイ国家大学外国語大学

(ULIS)の大学院生を対象としたハノイでの国際合同プロジェクト型研修(PBL)すなわち「ULIS スタディーツアー@ハノイ」を実施した。

本PBLは、海外連携大学の大学院生との協働的な学習・研究活動を通して、現地社会の多言語・多文化状況を理解し、異文化コミュニケーション能力および専門的通訳・翻訳実践力を高めることを目的とする。

2.2 活動内容

■ 事前準備活動

6月4日	プログラム決定。メンバー全員の顔合わせ打ち合わせの実施
6月17日～8月31日	各グループの打ち合わせの実施 3回
9月4日	参加者全員の打ち合わせの実施

■ プログラムの内容

主な活動内容

VNU 主催国際会議「AI & Translators' Future」(AITF)への参加
ベトナムにおける日越間の医療通訳に関する現地調査
成果報告会

日程と活動内容

【1日目】9月26日(金)

各大学からの参加者がハノイに集合。現地ホテルにてオリエンテーションを実施。

【2日目】9月27日(土)

午前:VNU 主催の国際会議「AI & Translators' Future」(AITF)に参加し、翻訳通訳教育の課題とAI技術の応用についての発表を聴講。APUの吉田准教授が基調講演を行い、グエン教員は「AIと教育」のセッションで発表した。

午後:海外連携大学の学生・教員との交流会を開催。研究テーマやキャリア形成について意見交換を行った。

【3日目・4日目】9月28日(日)・29日(月)

28日:医療通訳に関する現地調査の準備・打合せおよびインタビュー実施。

29日:在ハノイ日本人向けリハビリ施設2か所の見学を予定していたが、台風による強風と豪雨のため移動が危険と判断し、中止とした。

【5日目】9月30日(火)

午前9時から午後5時まで、ULIS構内で成果報告準備と修了証の授与を予定していたが、台風によるハノイ市内の冠水のため、活動場所をホテルに変更。

夜8時(ベトナム現地時間)より、オンライン形式で成果報告会を実施した。各大学チームが現地調査結果を発表し、学びを共有した。APU・THU・ULISの教員・学生の51名が参加した。

2.3 実践の成果

本実践を通じて得られた成果は、単なる知識の獲得にとどまらず、異文化協働能力の向上、実践的理解の深化、専門職としての課題認識の形成、さらには国際的な学術ネットワークの萌芽にまで及ぶものであった。以下では、その主要な成果について整理する。

異文化協働能力の向上と国際協働学習の深化

本研修の第一の成果は、日・越・台の大学院生との共同作業を通じて、異文化協働能力が大きく向上した点にある。参加学生は、言語運用能力の差異に加え、文化的背景や研究方法の違いに直面しながらも、相互理解と調整を重ねることで、協働的に課題に取り組んだ。

特に、事前のオンライン会議から現地でのフィールドワーク、さらには事後の振り返りに至る一連のプロセスは、単発的な交流ではなく、継続的な協働関係の構築を可能にした。この過程において、参加者は自らの前提や思考様式を相対化し、多角的な視点から問題を捉える力を養ったといえる。

また、このような協働的学習の蓄積は、単なる教育的効果にとどまらず、日・越・台の大学院生間における持続的な学術的関係の形成へとつながった。こうした関係性は、将来的なコミュニティ通訳者ネットワークの基盤となるものであり、大学院教育がその萌芽的役割を果たしうることを示

唆している。

現地調査を通じた実践的理解の深化

第二の成果は、ベトナムにおける医療通訳の実態を現地調査を通じて把握し、理論的知識と実践的知見を統合する機会を得た点である。

インタビュー調査や現地観察を通じて、ベトナム社会における医療通訳の役割や活動形態が、日本や台湾とは異なる制度的・文化的背景のもとで形成されていることが明らかとなった。特に、専門家間通訳と医師―患者間通訳の役割の違いや、医療従事者が通訳機能を担う事例などは、従来の理解を再考する契機となった。

これにより、参加学生は、通訳実践が単に言語能力の問題ではなく、社会制度や文化的文脈と密接に結びついていることを実感的に理解するに至った。このような経験は、教室内の学習では得難い実践的知識として重要である。

職業倫理をめぐる共通課題の顕在化

第三の成果は、医療通訳における職業倫理に関する課題が、三地域に共通する重要なテーマとして浮かび上がった点である。

調査の結果、ベトナムでは制度的な倫理規定が十分に整備されていない一方で、実務者が実践を通じて独自の倫理観を形成している実態が明らかとなった。また、学生によるインタビューは、通訳者にとって自らの実践を振り返る契機となり、「共通の職業倫理の必要性」を認識させる重要な機会となった。

このように、職業倫理は単なる制度の有無の問題ではなく、実践の中で形成される動的な要素であることが確認された。同時に、倫理の共有や体系化の必要性も強く認識され、今後の国際的ネットワークにおける中核的議題として位置づけられる。

国際的学術交流の経験と研究視野の拡張

第四の成果は、国際会議への参加を通じて、翻訳・通訳研究の最新動向に触れ、研究視野を拡張した点である。

特に、AI 技術と通訳の関係に関する議論は、言語専門職の将来像を再考する契機となった。AI は情報処理や事前準備の効率化に寄与する一方で、文化的文脈の理解や対人関係の調整といった側面においては、人間の通訳者の役割が依然として重要であることが確認された。

このような知見は、今後の通訳教育や研究において、技術と人間の役割分担をどのように位置づけるかという重要な課題を提起するものである。

3. スタディツアーの成果から示唆されたコミュニティ通訳者およびコーディネーター人材のネットワーク構築の展望と意義

本スタディツアーの実践から得られた成果は、単なる教育的効果にとどまらず、コミュニティ通訳者および通訳コーディネーター人材の国際的ネットワーク構築に向けた具体的な展望と意義を示唆するものであった。とりわけ、異文化協働の経験、現地調査に基づく実践理解、職業倫理に関する課題の共有、そして国際的学術交流の経験は、今後のネットワーク形成の方向性を考える上で重要な示唆を与えている。

第一に、異文化協働能力の向上と国際協働学習の深化は、ネットワーク形成の基盤として重要な意義を持つ。本研修では、日本・ベトナム・台湾の大学院生が混成チームを構成し、事前準備から現地調査、最終発表に至るまで継続的に協働する機会が設けられた。この過程において、参加者は言語運用能力の差異や文化的背景、研究方法の違いに直面しながらも、相互理解と調整を重ねることで共同作業を遂行した。こうした経験は、単なる知識の共有を超え、異なる他者と協働するための実践的能力の涵養につながったといえる。特に、オンラインと対面を組み合わせた継続的な協働プロセスは、一過性ではない関係性の構築を可能にし、参加者間に信頼関係と相互理解を生み出した。このような関係性は、将来的に専門職ネットワークへと発展し得るものであり、大学院教育がその萌芽的基盤として機能しうることが示唆された。

第二に、現地調査を通じて得られた実践的理解の深化は、ネットワークの内容的基盤を形成する要素である。本研修では、ベトナムにおける医療通訳の実態について、インタビューや観察を通じて多角的に調査が行われた。その結果、医療通訳の役割や実践形態が、日本や台湾とは異なる制度的・文化的文脈の中で形成されていることが明らかとなった。例えば、専門家間通訳と医師―患者間通訳の役割の違いや、医療従事者が通訳機能を担う事例などは、従来の通訳観を

再考させるものであった。こうした経験を通じて、参加者は通訳実践が言語能力のみならず、社会制度や文化的背景と密接に結びついていることを実感的に理解した。このような実践知の共有は、ネットワークの中で共通の議論基盤を形成し、各地域の経験を相互に参照しながら新たな実践モデルを構想するための重要な資源となる。

第三に、職業倫理をめぐる共通課題の顕在化は、ネットワークの質的深化に関わる重要な示唆である。調査を通じて、ベトナムにおいては制度的な倫理規定が十分に整備されていない一方で、実務者が現場での経験を通じて独自の倫理観を形成していることが明らかとなった。また、日本や台湾においても、制度は存在するものの、実践との間にギャップが存在することが示唆された。さらに、学生によるインタビューが実務者に自己の実践を振り返る契機を提供し、「共通の職業倫理の必要性」に対する認識を喚起した点は注目に値する。これらの知見は、職業倫理が固定的な規範ではなく、実践の中で形成・再構築される動的なものであることを示している。同時に、異なる地域間で倫理に関する認識を共有し、一定の共通基盤を構築する必要性も明確となった。この点において、職業倫理は今後の国際的ネットワークにおける中核的議題として位置づけられる。

第四に、国際的学術交流の経験と研究視野の拡張は、ネットワークの発展可能性を広げる要因である。本研修において参加者は国際会議に参加し、翻訳・通訳研究の最新動向に触れる機会を得た。特に、AI技術と通訳の関係に関する議論は、言語専門職の将来像を再考する契機となった。AIは情報処理や準備作業の効率化に寄与する一方で、文化的文脈の理解や対人関係の調整といった側面においては、人間の通訳者の役割が依然として不可欠であることが確認された。このような認識は、今後の通訳教育および実務において、技術と人間の役割分担をどのように設計するかという重要な課題を提起するものである。同時に、こうした課題を国際的に共有し、共同で検討していくための枠組みとして、ネットワークの必要性が一層高まるといえる。

以上のように、本スタディツアーの成果は、コミュニティ通訳者および通訳コーディネーター人材のネットワーク構築に向けた具体的かつ多面的な示唆を提供するものであった。それは、異文化協働を通じた関係性の形成、実践知の共有、職業倫理に関する共通課題の認識、そして国際的視野の拡張という複数の側面において確認される。これらの成果は、今後の継続的な教育・研究・実践の連携を支える基盤となるとともに、多言語多文化社会におけるコミュニティ通訳の質の向上と持続可能な人材育成の実現に寄与するものと位置づけられる。

4. 終わりに

本報告では、日本・ベトナム・台湾の大学院が連携して実施したスタディツアーの実践を通じて、コミュニティ通訳教育における国際共同教育の意義と可能性について検討した。本研修は、講義、フィールドワーク、グループワーク、国際学術交流を組み合わせた体系的なプログラムとして設計され、参加学生に対して多角的かつ実践的な学習機会を提供した。

その結果、参加者は異文化協働能力を高めるとともに、現地調査を通じてコミュニティ通訳の実態を具体的に理解し、理論と実践を結びつける力を養うことができた。また、職業倫理や制度的課題に対する認識が深化し、専門職としての課題を主体的に捉える姿勢が形成された点も重要な成果である。さらに、国際会議への参加や各国の大学院生との継続的な協働を通じて、研究視野の拡張と学術的ネットワークの萌芽が確認された。

とりわけ注目すべきは、これらの成果が相互に関連しながら、コミュニティ通訳者および通訳コーディネーター人材の国際的ネットワーク構築に向けた具体的な可能性を示した点である。異文化協働を通じて形成された信頼関係、現地調査に基づく実践知の共有、職業倫理に関する共通課題の認識、さらにはAIを含む新たな技術環境に対する問題意識は、いずれも今後の持続的な連携の基盤となるものである。

今後は、本スタディツアーの成果を踏まえ、より体系的な共同カリキュラムの構築や、実務者・研究者を含む多層的なネットワークの形成を進めていくことが求められる。加えて、構築されつつある人的ネットワークを一過性のものに終わらせず、継続的な交流・協働へと発展させていくための具体的な仕組みづくりも重要な課題である。

また、コミュニティ通訳を取り巻く社会的課題や技術的变化に対応しながら、教育・研究・実践の連携を一層強化していく必要がある。本実践で得られた知見と経験は、単なる一回の教育プログラムの成果にとどまらず、多言語多文化社会におけるコミュニケーション支援の質の向上と、持続可能な人材育成のあり方を検討する上での重要な示唆を提供するものである。今後のさらなる発展に向けて、本取り組みを継続的に深化させていくことが期待される。

(グエン タン タム 愛知県立大学国際文化研究科)

『多元文化交流』第18号(2026年6月)

〈特集〉: 誰と学ぶか——自己・他者・コミュニティ

参考文献

愛知県立大学国際文化研究科. (2025). 文部科学省 令和6(2024)年度 人文・社会科学系ネットワーク型大学院構築事業「外部評価・実績報告書」.https://www.aichi-pu.ac.jp/community-interpreting-studies/item/r06_report.pdf?250508